

現存する「須弥山儀(類)」のなかで、最も古いのは「文政七年」の墨書きがある静岡・龍津寺所蔵の「須弥山器」である。これは、小出長十郎(円通の門弟の一人)の回想に語られている「須弥山器」とも年代は一致しており、円通本人が製作に関わった須弥山儀である可能性が高い。この須弥山儀は、天文学としての梵曆理論よりは、須弥界の实在をデモンストレーションすることを目的にしたモデルであった。

しかし、同四時派と異四時派の対立が激化し、円通説を教条的に擁護する異四時派の人々が、各地に「梵曆開祖之碑」を建立して師説を顕彰するようになると、円通説の改良を唱える同四時派の人々は、より精度の高い「Orary(太陽系のシステムと諸星の動きを説明する宇宙儀)」のような須弥山儀を求めようになる。この要請に応えたのが、当時の天才的技術者である田中久重であった。久重の須弥山儀を模倣して、以後は同四時説にもとづく須弥山儀が数多く制作されることになる。その後、異四時・同四時の矛盾を克服する新理論をデモンストレーションするモデルとして、「視実等象儀」が製作される。

つまり、須弥山儀製作の目的は、①梵曆理論のデモンストレーションから、②理論の精緻化、同四時・異四時の対立、さらには田中久重との出会いによって多数の須弥山儀が製作される一方で、異四時派の人々が各地に頌徳碑を建立して仏暦を頒布する時期を経て、③展象と縮象を統合する新理論のデモンストレーションに再び戻っていくのである。

従来の須弥山儀の調査に見られる混乱の原因の一つは、第一期の「須弥山器」から第二期の「須弥山儀」、さらには第三期

の「視実等象儀」へ、という須弥山儀の変遷とその意義が明確に理解されていなかったことだろう。

科学理論であるとともに宗教論でもあるという梵曆の二重性は、当初から梵曆運動を二分する傾向を孕んでいた。梵曆運動を全体的に捉えてその思想的な変遷を見通す視座がなくては、第一期から第三期までの須弥山儀の変遷を理解することは難しい。

天眼・肉眼の二分法から、縮象と展象の合致を目指す議論の深化、さらには「視実等象」の新理論の展開、という梵曆理論の変遷は、近代的自然観との出会いを通じて形成された近代宗教論の日本的展開を考えるうえで極めて貴重な事例を提供してくれている。今後は、さらに基本的な調査を進めていきたい。

近代仏教における世界観と社会観

——真宗僧佐田介石を中心として——

常塚 聴

本稿は、幕末から明治初期に活動した浄土真宗本願寺派の僧侶佐田介石(一八一八—一八八二)の言論における社会観の考察を通して、日本近代初期における西洋思想の流入によって思想界、宗教界に引き起こされた世界観の変遷について論じることを目的とする。

佐田の言論活動は、須弥山世界観に基づく天文学説に加え、国防の観点からの排耶(反キリスト教)論、および維新期の経

済的混乱を背景とした富国経済論をその主とする。佐田の活動は概略して明治維新以前(一八六七)、明治ゼロ年代(一八六七—一八七七)およびそれ以降(一八七七—一八八二)に分けることが出来、それぞれその活動の主な対象と内容、およびその手段とした手法に変化をみることが出来る。

佐田の天文学説、排耶論、および社会経済論はそれぞれ独立して論じられ、また佐田の生涯の時期によってはそのいずれかに重点がおかれて主張されることがあったものの、その基礎となる世界観、ないし人間観は佐田の言論活動を通じて一貫したものがあつたとみることが出来る。佐田の人間観、文明観の基盤となつていたのは、認識論としての「天眼」という思想および「天稟・天授」という発想である。

佐田は、西洋の科学的宇宙論に対抗して日本独自の宇宙論として仏教の教説に基づいた須弥山世界観を主張するにあつて、科学的世界観はあくまで「憶説」つまり仮説によるものにと過ぎず、それは仮説である以上世界の真実の姿を決して捉え得ないものである、と主張した。それに対し、仏説に基づく須弥山世界観は仏陀の「天眼」によるものであり、人間の憶測を超えて世界の真実の姿を捉えたものであるとした。佐田は、人間の理性は常に誤りを含みうるものである以上、真実それ自体を理性によって捉えることは出来ない、と主張している。

佐田はその著作や建白の中で、繰り返し返して「日本」と「西洋」との間の本質的差異を強調している。その基本となつてゐるのは、「日本」と「西洋」とはその気候、環境等に差異があり、それにもなつて「日本人」と「西洋人」とはそれぞれ

「天稟」に違いがあるという思想である。佐田は、日本人と西洋人との間の「天稟」の違いは環境と同様人間の能力によって変更することは不可能であると論じた。いわば、佐田はいわゆる啓蒙主義的人間観、ないし進歩主義的な社会観をまったく否定しているといえるのである。

佐田が「日本」、「日本文化」ないし「日本人」について論じる場合、それは常に「西洋文化」ないし「西洋人」との比較の中で、それとは対照的なものとしてその独自性が強調される形で論じられている。このことは、西洋文化との接触によってそれへのアンチテーゼとしての「創られた伝統」として佐田の日本文化観が形成されてきたものであることを示している。佐田が「西洋には西洋に固有する処の文明開化あり、日本には日本に固有する処の文明開化あり。」(「建白(二十三題の議)」・明治七)と述べているとしても、それは両者を対等のものとして見ているというよりむしろ一種の文化的ナショナリズムの表明というべきであろう。

佐田は必ずしも近代的な意味でのナショナリズムを主張した訳ではなく、佐田自身が西洋との比較の中で「日本固有の」ものとして「再/発見した」「日本文明」の姿に「回帰する」と、ないしはそれが「天稟」であることを理解するべきであると主張した。佐田のこの主張の背景には、人間の認識は「天眼」によつてのみ捉えられる「真実」そのものを認識することは出来ず、人間ないし社会に固有の「天稟」は人間によつては変更不可能であるという彼の人間理解があつたということが出来る。